キズナエピソード

丘田マリアンヌ　6話

１２３４５６７８９０１２３４５６７８９０１２３４５６

//ヴィジュアルノベル形式開始

//マリアンヌの部屋

俺は泣きじゃくるマリアンヌを優しくなだめ、

彼女の部屋へと連れて行った。

横に座り、彼女が落ち着くまで背中をさすってやる。

//次ページ

やがてしゃくりあげながらも、

マリアンヌはポツポツと事の顛末を話してくれた。

コミケの後、急にイジメが始まったこと。

みんなが自分を見る目が怖くて、不登校気味になったこと。

心配をかけたくなくて、相談できなかったこと。

そして、仲間だと思っていた人がイジメの第一人者だったこと。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//ADV形式開始

［マリアンヌ］

「ひぐっ。

もう、どうすればいいかわからないんス……

何もかもが怖くて……何も出来なくて……」

［マリアンヌ］

「や、やっぱり僕みたいな弱い人間は、家に引きこもって

もっとひっそりと生きるべきなんスよね……」

[マリアンヌ]

「そ、そうすれば、誰かを傷つけることもない……、

誰からも傷つけられることもない……

ぼ、僕は……、僕みたいな弱い人間は……」

［とびお］

「なあ、マリアンヌ……！」

[マリアンヌ]

「ひぐっ⁉」

[とびお]

「あのさ、これ……見てくれないか？

会ったら、見せたいと思ってたものがあるんだ……」

［とびお］

俺はスマホの画面を見せた。

それは、とある人から貰ったメールの返信だった。

［マリアンヌ］

「え？　こ、これは……？」

［とびお］

「あのイベント会場で、編集者から名刺をもらっただろ？

俺、あの後で直接会ったりして、やり取りしてたんだよ。

で、これがマリアンヌの作品に対するコメント」

［］

『まだ荒削りな部分はあるものの、

作品から漂ってくる優しい空気感、独創的な世界観からは

作者の人柄が感じられます。ぜひとも――』

［マリアンヌ］

「――『ぜひとも一緒にお仕事をしたい』？

こ、これって……ぼ、僕がプロとして……⁉

……嘘、っスよね？」

［とびお］

「嘘なんかじゃない。

プロの編集者が認めてくれてるんだよ、

マリアンヌの作品を」

［マリアンヌ］

「そ、そんな、僕……まだまだ絵も上手くはないし、

こ、こんな夢みたいなこと、あるわけが……」

［とびお］

「夢みたいなこと？　君はその夢を現実にしたんだ。

それは誰もができることじゃない。

ずっと努力を続けてきたマリアンヌだから、出来たんだよ」

[マリアンヌ]

「僕、だから……？」

［とびお］

「あぁ。だから、もう自分を責めなくていい。

君は弱い人間なんかじゃないよ、マリアンヌ。

君の中にあるのは弱さじゃなくて……、優しさだ」

[マリアンヌ]

「や、優しさ……？」

[とびお]

「マリアンヌの漫画がなんであんなに心に刺さるのか、

やっと気付いたんだ……」

[とびお]

「あの独創的な世界観、ストーリー、キャラクター、

全てにマリアンヌの繊細な優しさが盛り込まれてる

からなんだって……」

[とびお]

「そんな優しさに溢れた作品だからこそ、

プロの目にも留まったんじゃないかな？

だからもっと自信を持っていい」

［マリアンヌ］

「そっか……。僕の世界観……

ちゃんと、伝わってたんだ……」

［マリアンヌ］

「と、とびおくん……、

ぼ、僕、頑張るっスよ……！

もっと胸を張って生きていくっス！」

[とびお]

「あぁ、その意気だ！

でもさ、それでも何かに負けそうになった時は……」

[とびお]

「一人で抱え込まないで、俺を頼ってくれないかな？

どんな事があっても、俺がずっと側で支えるから」

[マリアンヌ]

「と、とびおくん……、

あ、あり……がとう……」

［とびお］

マリアンヌが潤んだ瞳で見上げてくる。

俺が彼女の肩に手を回すと、

マリアンヌははにかみながら睫毛を伏せる。

［とびお］

そして、俺は彼女の口元へ、

静かに唇を重ねた……。

//【R18版の場合、ここに挿入】

//暗転

//聖チャールズ学院・3年教室

［］

翌日。聖チャールズ学院、3年教室。

［マリアンヌ］

「ぼ、僕はもう、逃げないっスよ」

［漫研部員］

「なっ……！」

［女生徒A］

「……え、なになに？　喧嘩？

マリアンヌさん、急に登校したと思ったら、

いったいどうしたのよ？」

［女生徒B］

「っていうか、丘田さんの変な噂流したのって、

もしかして、あの子だったり……？」

［漫研部員］

「丘田さん、あの時に私が言ったこと忘れたの……？

あんたみたいなヘタクソは、大人しく

一生、家で引きこもってなさいよ！」

［マリアンヌ］

「も、もう逃げるのは嫌なんっス……！

支えてくれる人が……応援してくれる人が……

ぼ、僕には居るから……」

[マリアンヌ]

「だからもう、なにがあっても夢を諦めないっス！」

［女生徒A］

「……え、なに、なに～？

今のもしかして、彼氏持ち発言？　きゃー！」

［女生徒B］

「ま～実際、丘田さんって肌きれいだし、

漫研の中じゃ飛びぬけてスタイルもいいし……

そりゃ普通に彼氏いそう。いいなー」

［漫研部員］

「な、なっ！

なんで丘田さんばっかり！

私のほうが……私のほうが……」

=========================スチルカットシーンB開始=========================

［マリアンヌ］

「あの……、

僕があの時言ったこと、覚えてるっスか？

僕は、あなたのこと下に見たことないって……」

[漫研部員]

「は、はぁ……⁉

そういう発言がすでに上から目線なの！

私のほうが絵だって……」

[マリアンヌ]

「はい。あなたの絵は僕より上手いっス

いつも、こんな風に描けたらなって……

僕、ずっと憧れてたんスから……」

[漫研部員]

「は⁉　な、なに言い出すのよ！」

[マリアンヌ]

「だから、ストーリーとキャラ設定を煮詰めれば、

もっとよくなるっス！

そこで悩んでたんじゃないっスか……？」

［漫研部員］

「え、あ、うん……じゃなくて、はぁ？

なんで、アンタ、そんな……私に優しくするのよ。

私はアンタのこと……」

［マリアンヌ］

「漫画描いてる者同士だからわかるんっスよ！

だって……、ぼ、僕たちは、同じ夢を見てきた

仲間……、じゃないっスか……」

=========================スチルカットシーンB終了=========================

//ADV形式終了

//ヴィジュアルノベル形式開始

//白い部屋

そこで意識が覚醒した。

「……あんな可能性もあったのかもしれない」

俺はひとりごちて、白い壁を眺める。

大きなスクリーンに、マリアンヌとの思い出を幻視する。

//次ページ

人見知りで顔を真っ赤にするマリアンヌ。

優しい作品を描いていくマリアンヌ。

一人で抱え込んでしまうマリアンヌ。

そして、勇気を持って一歩踏み出したマリアンヌ。

……そのどれもが愛しかった。

//次ページ

自然と胸の奥から気持ちが沸き起こってくる。

マリアンヌを守りたい。

俺は心にそう誓った。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//6話END